「義の実をあふれるほど受けて」　　七里教会　２０２２年６月１２日

フィリピの手紙１：１－１１

佐々木　佐余子

テサロニケの信徒への手紙の次に、今朝は新たにフィリピの信徒への手紙を学びたいと思います。どうしてフィリピなのかは、執筆された年代順になっているからです。パウロは最初にテサロニケの信徒への手紙を書き、伝道旅行を続けて、エフェソに着いた時、ユダヤ人たちから騒動を起こされ、捕らわれて入獄の身になってしまったのです。そこで、このフィリピの信徒への手紙を執筆したと言われています。ですが、諸説があるのではっきりしたことは不明です。この手紙は別名「喜びの書簡」とも言われています。牢獄に囚われの身であるにもかかわらず手紙の随所に、神に感謝と喜びを表しているからです。

このフィリピ市はローマの植民地であり、市民の大部分はローマの市民権を持ち、皇帝の直接な庇護があったのです。また離散したユダヤ人が住んでいたのですが、その数は少なく、ユダヤ教の会堂の数も少なかったのでした。ただ町の川沿いに祈りの場があり、集会を持っていました。

１章１節を読むと、「キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ」とありますが、こういう手紙の書き出しは、パウロがいかにフィリピにいる信徒たちを敬愛し、同労者と考えているかわかる書き出しです。パウロは第２回目の伝道旅行でフィリピに行き、そこで伝道して今は、エフェソにいるのです。パウロは主イエス・キリストを信じている者を聖なる者たちと呼んでいます。それは、ここにおられる方々も聖なる者たちなのです。けれど、わが身を振り返ると「一体、聖なる者たちと呼ばれていいのかしら」と思います。とても恥ずかしくて、そんな風でもないし、ごく普通の者だからと思ってしまいます。けれどパウロは、そのような者たちの手を取って、「あなたも聖なる者、聖徒ですよ」と招いてくださいます。道徳的・倫理的な方がそう呼ばれるのではなく、尤もそれも一つの見方ですが、主イエス・キリストの贖罪、贖い（血や命で罪や失敗の埋め合わせをすること）を信じる者は聖なる者、聖徒だとパウロは考えているのです。

フィリピにいる信徒たちはどんなにパウロの喜びだったでしょう。使徒言行録の 16 章にありますが、マケドニアでパウロは幻を見、本当は東に行こうとしたけれど、西に向きを変えてフィリピ伝道が始まったのでした。その後テサロニケに向かうのですが、海峡を渡って最初にフィリピ伝道をしたのです。１６章の１１節にこうあります。「わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、そこから、マケドニア州第１区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った」とあります。そこに、裕福な紫布を商う人で、神をあがめるリディアという商人がいて、神は彼女の心を開かれたので彼女とその家族がバプテスマを受けたとあるのです。そして、占いの女奴隷を癒したことから、この女の主人たちから恨まれて、投獄されてしまったのです。そして、大地震によって囚人が逃げてしまい、看守が自殺しようとしたのをパウロとシラスが救ったのでした。「主

イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」看守と家族はバプテスマを受けました。このように 3 人を通してフィリピ伝道が始められたのでした。パウロにとって大きな喜びでした。マケドニアは伝道の架け橋になったのです。

パウロはこの手紙を聖なる者、並びに監督者たちと奉仕者に宛てて書いています。この奉仕者とは別の言葉で言うと、執事としてあらわされます。しかし、監督職や執事職がこの当時決められていたわけではなく、長老のように幅広く教会を監督し指導し、奉仕した人々として考えていたのです。もしパウロが七里教会に手紙を出したのであれば、受取人は牧師と信徒全員であるでしょう。発信人はパウロとテモテです。しかし、ここでパウロは使徒としてではなく、キリスト・イエスの僕であると語っています。パウロは人の僕を言っているのではなく、神の僕という言い方をしています。パウロが自分を神の僕であると言い切った時、そこに、大使徒パウロの貫禄が現れます。

ところで、この僕という言い方ですが、わたしはずっとこの言葉に引っかかっていました。僕は奴隷のことです。パウロは奴隷を容認しているのだろうか。容認していないならば、どうしてわざわざ奴隷という言葉を使うのだろうか。丁度その頃、信仰の反抗期だったのです。信じつつ、もう一方ではふつふつと疑問も起こりました。そういう時、ある方がこういうことを言われたのです。「キリスト教って奴隷制度については何も言わないのですね。そういうところがおかしい。」私は、ただ聞き流していたのですが、少しずつ分かるようになりました。思うに、使徒たちは賢かったと思います。あの当時教会の人たちが、奴隷制に反対ののろしを上げ、ローマ政府に反抗したら、恐らく、教会は、徹底的に、叩かれつぶされていたのではないか。使徒たちは、もうすぐ主の来臨が来るからだと考えていたのです。そして、クリスチャンは神の前では、平等だからと思っていたからだと思う。驚くなかれ、パウロも以前は奴隷だったのです。恐らくパウロの祖父はローマに住んでいて、ユダヤ人がローマと戦争があった時、パウロの祖父たちは、いったん、ローマに囚われていたけれど、その後、恩赦があり、解放されたのではないか、と言われているのです。その時、ローマ市民権が与えられたらしいのです。パウロのお父さんは子供を連れて、キリキアのタルソに住んだのです。その地でパウロは、ユダヤ教の信仰深い両親のもとで育てられました。そして、パウロは、主の十字架刑の後、教会の人たちを迫害したけれど、突然、天から主イエスのみ声が聞こえ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか、」と聞いて、回心するのでした。奴隷制は、まだ、その頃は、機が熟していませんでした。しかし、時代の流れによって、神は人を起こし、改革されていきます。アメリカの南北戦争のエイブラハム・リンカーンがそうではないでしょうか。また、バプテスト派のキング牧師も黒人の公民権運動のため戦いました。しかし、この世の悪の力はものすごく強いのです。彼らは何者かの銃によって心ざしなかばで倒れました。未だに黒人差別は強いのです。黒人だけではなく、アジア系の人々も差別されています。女性も差別されます。大統領になかなか女性はなれません。でも、昔に比べたら格段と差別は少なくなっていますね。ある日本人の男性の歌手がいて、黒人霊歌を歌いたいために、「僕は黒人に生まれたかった」と言った人がいました。驚きました。差別の

中心は人間の罪です。人間の醜い心が差別を生みます。主イエスは罪を打ち破りました。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。」この誰でも、という言葉は大変ありがたいのです。この当時、女性や子供は数に入らず、また奴隷も然りでした。けれどイエスさまは、誰でも、女性も子供も奴隷もわたしに来なさいと言われました。素晴らしい福音ですね。

大分昔の話ですが、テレビ討論会がありました。題は「宗教は現代を救えるか」というテーマでした。ある評論家は言い放ちました。「宗教が現代に与えるものは何もない。」でした。宗教はいろいろな宗教があるけれど、キリスト教は良い働きをしていると思います。幕末の頃、日本に来られた宣教師の先生たち。貧しい日本人のため女子教育をするため学校を建てたり、病院を作ったり、孤児や身寄りのない子供たちを集めて面倒を見たり、日本人が出来ないことをされたのです。そういうことをわたしたち、キリスト者は時々思いださなければなりません。日本のキリスト者は数が少ないので政治的には目立ったことは出来ないけれど、でも内村鑑三は韓国では真の預言者だと言われています。戦争反対を貫いたからです。アメリカでは教会に行っている人のパーセンテージは相当高いので、大きな働きをしているそうですよ。例えば慈善運動です。教会が主体となって貧しい人に食を与えるとか、衣服の提供はあたりまえだそうです。とにかく教会が大きいので規模が違う。あの評論家はどこを見ているのかと思います。七里教会では子ども食堂をお手伝いしています。ここに来る前はどういうことをしているのかしら、と思っていました。でもすごいですね。皆さん手際が良くて50食から６０食まで数人のボランティアで作ってしまうのです。食材はいろいろなところから提供していただいて無料なのです。あらかじめ登録されていた方々が時間になると、続々と教会に来られます。皆嬉しそうにして大きな袋を持参し詰めて持って帰られるのです。日本ではこういうことをしている教会は、まだ少ないと思いますよ。だから、七里は先をいってますね。夏には階下で子供たちの勉強を見てくださる大学生が来て、学習塾のようになるそうです。それも楽しみです。最初は不安でしたが、今はやる気が出てきました。少しはアメリカの教会を見習いたいと思います。

2節にまいります。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」という祝福の言葉は、ほとんどのパウロの手紙に書かれています。パウロは人間が好きなのだと思う。ある老牧師が言いました。「牧師は人間が嫌いじゃあ、なれんのう」と。本当にそうですね。わたしたちキリスト者は、いつも平穏な生活や楽な生活をしているわけではなく、洗礼を受けたがために、かえって辛い立場に立たされることもあるでしょう。そのような現実の中で、信仰を与えられ、イエス・キリストの霊によって生かされ、主に従って歩むのです。パウロはいつも戦っていました。そのパウロが神からの平安と祝福を祈り求めたのです。昔、言霊、言葉に霊がこもると考えられていたらしいです。言葉の力を信じていて、その言葉の使い方、言い方によって、本当にその言葉通りになる、と思われていたらしいです。ヨハネによる福音書では、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」とあります。そのようにパウロの祝祷は信徒にとって、大きな喜

び、励ましの言葉だったのです。３節に「わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し」とあります。パウロの手紙にはいつも感謝と喜びが書かれています。テサロニケ書にも「すべてのことについて感謝しなさい」と教えます。どうしてパウロはいつも感謝なのだろうか。パウロは現実から目をそらして単純に感謝、感謝と繰り返しているのでしょうか。いいえ、そうではないのです。パウロは体が弱く、眼も悪かったようです。生活は貧しく、迫害が押し寄せ、身の危険も感じたでしょう。このフィリピの書簡も獄中で書かれたのです。それなのに喜びが湧き上がってくる。それは救われた喜びからの気持ちなのではないでしょうか。パウロは、あの当時で言うと律法学者、エリートなのでしたが、少しも誇ることなく、自慢することなく、反って主を誇ったのです。そして６節を読むと、「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」と語っています。主の来臨が来る日には、神によってあなたがたに栄光が与えられるでしょう、と言っているのです。パウロはエフェソで捕らえられ監禁された時も、法廷で福音の弁明を立証した時も、いつもフィリピの信徒たちを思い、深く心に留めていました。苦しみの時も、この苦しみは信徒たちと共有されていると思う時、その苦しみ、痛みは主の恵みでした。この戦いは主イエス・キリストを信じる者、すべての人の戦いであると思った時、喜びでした。パウロとフィリピの人たちの友情は人間的なものを超えているのです。もし、人間的な感情だけであるなら、ただの親近感や思慕だけならいつか、挫折するでしょう。パウロはフィリピのクリスチャンに、キリストの形を見ているのです。フィリピの人々の中に、生けるキリストの姿を見ているのです。

考えてみれば、わたしたちもそうではないでしょうか。その人の中に、イエスさまが宿っている、働いてくださっている、形作られている、と思った時、うれしさがこみ上げてきて、同労者としての共通の意識が湧き上がってくるのです。

それ故、９節、１０節、１１節「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって、与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとを、称えることができるように」されたいと思います。